

# 奄美大島要塞跡は何がすごいのか　期待と課題

市民ミュージアム大野城心のふるさと館 赤司善彦

## はじめに

奄美大島要塞跡は、大島海峡付近に遺構が集中的に残存し要塞全体の理解が可能なこと、さらに近代日本の国防施策と密接に関連する遺跡群であることなどが評価されて国史跡指定となった。一つの到達点だが、要塞跡保護（保存と活用）の始まりでもある。また、末永く史跡を保護（保存と活用）するには、行政内の協働と住民参画が欠かせない。

## 1 何がすごいのか

遺跡の本質的価値は明治時代から太平洋戦争末期まで、そのスケールの大きさが全国的に見て稀有な例である。また、個人的には砲台の置かれた場所は眺望地であり、海をながめる場として貴重である。さらには地元の方々にとって誇りとされていることである。

要塞は外敵から重要な場所を守るために築かれた構築物である。古代や中世の山城、南島のグスクと同じで戦略的要地に各種施設を配置している。その地理的環境と軍事的環境を念頭に置いて奄美大島要塞跡のスケール感を純粋に歴史的な遺跡として楽しんでみることができる。例えば、どのように守るのか（前提条件　規模・配置　装備わかる範囲で）を考えながら遺跡を見て回る。山城の要素（眺望の確保　敵の動き察知　自軍兵力や防御態勢の隠蔽　攻撃方法）や、縄張り（要塞の施設や人員の配置による空間構成）、敵の攻撃からの防御（砲台等の隠蔽）、城の出入り（要塞の補給路・人員の連絡通路など）、火力の発揮方法（砲台のネットワークなど）を自分なりに考える。そのため案内ガイドも必要。

## 2 戦争遺跡の考古学と埋蔵文化財行政での位置づけの歴史

（考古学）歴史学では明治以降は軍部が軍事史研究を進めていたので立ち入らなかった。戦後も戦争への反省から軍事史研究は長くなされておらず、城郭史ですら軍事を正面から避けていた。城郭は権力の所在、社会経済、地域支配などの観点からの研究がなされていた。そのため、城郭史や軍事史は在野の研究者が中心となって進めていた。近代の戦争遺跡もアンタッチャブルに近い扱いだった。

転換したきっかけは、1984年に沖縄県の當眞嗣一氏が「戦跡考古学」という用語を提唱したことである。戦争遺跡や戦争遺留品を科学的に追求して戦争の実相にふれることを目指した。その後、少しずつ戦争遺跡の調査事例が増加し、考古学界では『考古学ジャーナル』の1987年に「現代史と考古学」のなかで戦争遺跡が取り上げられ、2016年に戦跡考古学－沖縄・本土の防衛が特集された。

（埋蔵文化財）1990年文化庁は「日本近代化遺産総合調査」を開始した。1990年に沖縄県南風原陸軍病院を町指定、1995年に原爆ドーム国指定史跡し1996年世界遺産となるなどの動きが出てきた。1994年に文化庁は埋蔵文化財として取り扱う遺跡の範囲として、近現代に属する遺跡は地域において特に重要なものを対象と位置付けた。以前は埋蔵文化財の対象外だったのである。今回の調査は埋蔵文化財の「町内遺跡発掘調査等事業」の一環で実施している。戦争遺跡は各地で調査が進むので、奄美大島要塞跡は教科書的存在となる。

### 3 持続可能な取組 町の体制づくりと市民参画

今後の取組として、今回の指定範囲は極めて小さい範囲であり、史跡指定拡張は計画的に進める必要がある。遺跡のデジタル保存も今後重要。推進の体制作りも急務である。

ところで、遺跡のもつポテンシャルは歴史的価値だけではない。各種の団体、地権者、地域住民によるさまざまな視点からの価値の掘り起こしが必要である。また、行政主導ではなく、行政はあくまでも地域を支援する姿勢が求められる、さらには他部局との協働によって推進することが肝要だと思う。

(地域住民のアイデンティティの掘り起こし) 奄美大島要塞跡の史跡整備を通じてその魅力を発揮させること。私たちの町にはこんな素晴らしいストーリーがあったということを、住民の皆さんが再確認すること、そして地元住民が誇りに思うような取組が重要。

(観光への文化遺産の活用) 住民の皆さんに奄美大島要塞跡の内容が周知されることと併行し、国内外へその魅力あるストーリーを発信しなければ、十分な活用が望めない。そのためには、戦略的かつ効果的な発信が求められる。観光資源としていかに磨き上げるかにかかっていると言っても過言ではない。有識者の意見を取り入れることや、観光部局を始め関係部局が一致団結して協働する。(歴史散策×健康づくりなど楽しく両立させる)

(他の市町との連携) 市町を越えた文化遺産等の拠点を回遊するような人の流れを、どのように生み出すのかが大きな課題である。そして観光客を受け入れる拠点づくりや、テーマに合わせた回遊ルートの設定が必要だが、その移動手段の確保も重要である。回遊性の向上など、他の市町と一緒にになって知恵を絞って頂く必要がある。

最後に、一口に地域との連携といつても、実際にはなかなかむずかしい。手を携えてともに歩きましょうといつても、相手との歩幅が合わず、会話も弾まないような楽しくもない散歩のようなものになる可能性もある。連携が実を結ぶには、そもそもなぜなぜ連携の必要があるのか、そして一番大事なことはお互いにとってどのようなメリットがあるのか、そうした共通理解がなければ、聞こえの良い「連携」に終わるだけであろう。

### 4 取り組み事例

#### ○沖縄県南風原陸軍病院濠

首里に第32軍司令部の兵站地として、町内に司令部の一部や陣地が置かれた。

- ・1990年町指定文化財 沖縄陸軍病院南風原壕群 (発掘調査に証言や記憶を照合)
- ・整備方針基本理念 戦争に起因する負の遺産も文化財として価値がある文化財
- ・整備基本方針 学びの場 祈りと平和創造の場 憇いの場

「壕の教育力」 壕に入る人の感性を揺さぶり戦争認識へと向かわせる力

#### ○大分県宇佐市(海軍航空隊)保護の取組

昭和14(1939)年宇佐海軍航空隊が開隊し、艦上機(航空母艦から発着する航空機)の搭乗員を養成するための訓練施設が設置されている。現在でも、軍用機を格納した掩体壕や、機銃掃射の痕が残る落下傘整備所など、多くの戦争遺構が残されており、「平和の大切さや命の尊さ」について感じ考える機会を創出するため、戦争遺構の保存を推進している。

- ・1995年 市指定史跡 城井1号掩体壕 1998年に史跡整備  
市民参画 ボランティア団体「豊の国宇佐市塾」現地調査・講演会開催
- ・平和ミュージアム建設準備 子どもたちに身近な歴史を学習してもらう場

○九州国立博物館ボランティアによる武寧王生誕伝説の島調査 (以上)